

広島から発信する未来への希望と提言

広島は希望の土地、奇跡の復興を語り継ぐ

1994年、広島アジア大会で訪れたカンボジア選手団の選手の一人がこう言いました。
「広島は私たちにとって希望の土地です。ポルポトの虐殺によって荒廃した私たちの国も、いつかはこの広島のように復興できるのだ、そう思うと希望が湧いてきます」

広島に原爆が投下されてから七十年以上が経ち、街中でその傷跡を見ることはほとんどありません。被爆直後は、「七十年間草木も生えない」と言われていた大地にも緑が広がり、その急速な復興は、まさに奇跡と称するに値するものです。

けれど国際平和文化都市広島には、原爆の悲惨さを伝える施設は原爆資料館等数々あるものの、原爆投下直後から現在に至るまでの先人たちの涙ぐましい努力の軌跡、復興の歴史は、どこに行ってもまとまった形で見ることはできません。

1945年8月6日、広島に世界初の原子爆弾が投下されたその日から、広島の復興の歴史は始まりました。

路面電車は9日に己斐、天満町間が、鉄道が宇品線は翌7日、山陽本線も広島、西条間が8日午後から運行を再開しています。

電気も二日後の8日には広島駅周辺や主な病院で通じるようになり、電気、ガス、水道、生活に欠かすことのできないライフラインは、そのほとんどが、被爆わずか一年以内に復旧しています。

今世界は大きなパラダイムシフトの時を迎え、世界各地で紛争が勃発し、町が廃墟と化し、膨大な数の人たちが難民として祖国を追われています。

原爆で焦土と化し、放射能の残るマイナスの状態からごく短期間で近代的な都市を築き上げた広島の復興の歩み、それを示すことは、世界中で苦しみを抱えた何億という人たちにとって、この上ない大きな希望を与える福音となるものです。

過去の遺産を未来を紡ぐ財産に

広島(ヒロシマ)は、世界に通じるビッグネームです。

悲惨な過去の歴史を持ち、そこから奇跡の復興を遂げた広島だからこそ、未来へと通じる新たな提案をする力、するべき使命があると考えます。

広島がマイナスの状態から“今”を創り上げたその力と知恵は、完全に行き詰まりを見せる現代文明に対し、新たな人類の生き方を提言するものとなるはずです。

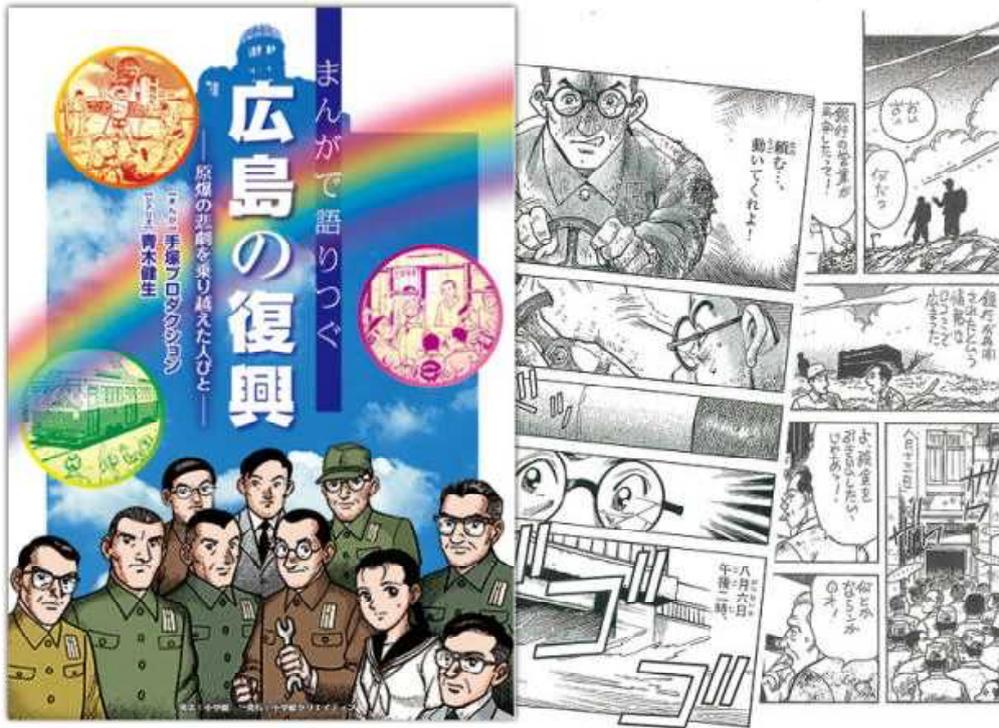
戦争のない世界、自然と共生し、未来へと続く持続可能な社会のあり方、それを広島から発信していくべきです。

また広島がそれを実践するひな形となるのが、被爆都市であるという過去の遺産の価値を最も高め、それを未来を紡ぐ財産へとしていける理想の道であると信じます。

まんがで語りつぐ『広島復興』

2015年7月、被爆直後からの復興の歩みを、各種ライフライン、バスや鉄道、お好み焼きやカーブに至るまで、それぞれ項目別に分かりやすくまんがで解説した『広島復興』という本が出版されました。

これを読めば、広島の復興の歩みがいかにすごいものであるかがよく分かります



まんがで語りつぐ広島復興: 原爆の悲劇を乗り越えた人びと (小学館クリエイティブ単行本)
1,800 円+税

昨日の朝、積極人間の集いという会合で、この『広島復興』を監修された郷土史家の田辺良平さんと偶然お会いすることができました。

田辺さんも、広島でこの復興の歴史が語りつがれていないことをとても憂慮しておられます。

広島復興はただ漫然と進められてきたものではありません。

そこには語りつがなければならない数々の感動のドラマがあるので。

未来へと通じる一步を

生命(いのち)はすべて精妙なバランスの上に成り立っています。

広島は使命も、被爆都市であるという過去の遺産、奇跡の復興、そして未来への提言、この三つを等しいバランスで発信していくことが理想だと考えます。

けれどそれよりも大切なことは、まずそれに向けての第一歩を踏み出すことです。

原爆資料館のような立派な建物でなくてもいい、どんな小さな施設、あるいは例えひとつの部屋であっても構いません、これまでほとんど振り返られることのなかった先人たちの復興の努力、広島だからこそ示すことのできる次代を担う人たちへの提言、そういったものを伝えていく、その第一歩を踏み出すことが求められます。

時代の中心はハード(モノ、建物)からソフト(情報、思い)へ、時の流れは過去から未来へと移りつつあります。

まずは広島の本来的な使命を心に刻み、それに向かった第一歩を記すこと。

その思いと行動は、必ずや遠くない未来に大きく結実するものと信じます。

2017.1.28

酒井伸雄

<http://yogananda.cc>